

山崎郷土叢

No. 64

59. 9. 5

兵庫県赤粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩 (二十二)

島田 清

二、池田輝澄時代 (統二十)

○ 奉書到着と輝澄

(1) これまで、江戸時代初期の幕府が、駿府(静岡)をどのよう
に取扱ってきたかを具体的にながめてきたが、まとめていうと、
まず、東照神君徳川家康が大御所となって以来、この地に居を
定め、大小の政務をとりしきって遂に大阪城の豊臣氏を滅亡さ
せたことに根本の性格が示されている。すなわち、幕府の所在
地、江戸―拡大していえば関東地方全域―を守るといふ立
場からは、その直前に位置し、外敵を一步も近づけない、とい

目次

近世初頭の山崎藩 (二十二)	島田 清	一
長水城の盛衰 (中)	岩井忠彦	五
佐藤善五右衛門景長と 津田九郎右衛門の刃傷 (上) 堀口春雄		八
高野山参拜の記	志水美好	十
史跡部便り	久保貢夫	十二
事務局だより		十二

うことであり、西方に対しては、ここから ^{にら}みをかかせ、また
進撃の発進地となる、ということである。

元和二年、家康が薨じ、第九子頼宜が駿府の城主となった。
この場合は、この性質をそのまま継承したものと見てよい。

元和五年、広島藩主福島政則が改易された。このため、紀伊
和歌山の浅野長晟がそのあとへ封ぜられ、頼宜は和歌山城主と
なった。和歌山は、淡路・阿波と続く南海道の東端にあり、瀬
戸内海を通じて西国を押さえる要地である。そのうえ、大阪・
京都など、畿内中枢部の背後をおびやかす要衝でもあった。豪
傑な性格をもつ頼宜をここに封じたのは、けだし、適材適所と
いってよからう。

秀忠の第二子徳川国松丸、すなわち後の忠長は、元和二年、新知二十萬石をもって甲斐国に封ぜられた。次で、同八年十一月、信州小諸五萬石を加え、寛永元年には三十萬石を加えられて駿府五十五萬石の大守となった。このときも、幕府の駿府に對する考えかたはかわっていない。

しかし、忠長の性格は、頼宜と大きくかわっていた。頼宜が常に天下の動靜に注目し、政治的・軍事的な方面に心をくばったのに対し、忠長は心が内へ向かい、兄家光と拮抗し、これに取ってかわることをもくろんでいた。忠長は、生来、恵まれた才能をもっていたし、秀忠夫妻の寵愛も一身に集めていたが、これがかえって忠長を慢心させ、兄を兄と思わぬふるまいをとらせたのである。厳重な身分社会の封建の世に、たんなる才能を誇示して兄弟の秩序を無視する忠長の存在が、いつまでも許される筈はない。

寛永三年九月、母浅井氏が薨じた。忠長の行動は、この後、しだいにわがままとなり、遂に、八年の春、勘氣を蒙り、五月、疾を養うため、という名目で甲府ちつきま盤居を命ぜられた。

翌、寛永九年一月二十四日、秀忠は五十四歳で薨じ、家光は、思うままの腕をふるうこととなった。同年十月二十日、家光は、内藤・牧野・井上の三使を派遣し、甲州は遠隔の地であるからとの意を伝えて上州高崎城に移し、城主安藤重長に身柄を預けた。忠長の所領、駿・遠・甲の五十五萬石は、このとき、幕府の手に没収された。

『存採叢書』の「寓簡」に載せられた「池田輝澄之記」を見ると、寛永九年四月、輝澄は例のごとく、在所へのお暇をいただくことについて登城し、西ノ丸の秀忠（台徳院）へもお礼言上のため伺候した。このとき、秀忠は病臥していたが、取次阿部豊後守をもって輝澄におあいになりたい旨、申され、寝所に召し寄せられて、

將軍ヨリ在所へ暇ノ由。其方事、將軍宜ク被思。其方仕合ニテ有り。追付、被呼ニテ有り。〃

と、直接のことばを賜った。

輝澄は謹しんで承り、退出すると、さらに、老中より内証があり、

〃勝五郎幼息のこと、因州城下へ参り、諸事、仕置など、

最新型カラー現像機導入 カラープリント・スピード仕上げ

良い品を・安く・安心して買える店

Specialty Camera Shop

コーエカメラ

兵庫県山崎町東鹿沢26-3 ☎2-2089

身分然るべきこと。〃

といわれた、と記している。

このひとくだけは甚だ重要なところであるが、史料となる「寓簡」には一つの問題点を含んでいる。それは、秀忠の薨去が寛永九年一月二十四日であるのに、四月に伺候した、という矛盾で、この点については、「正月」を「四月」と誤記したものであると推測されている。

宍粟郡の山崎城にかえった輝澄は、藩政の実態をつぶさに検分し、六月には戸倉峠を越えて因幡に入り、甥光仲の家政を見

た。このときは、藩政全般のほかにも、忠雄の遺言である河合又五郎処理の相談を老臣荒尾内匠とするなど、甚だ多忙であった。

山崎に帰ったのは、おそらく七月に入っていたであろう。ゆっくり休息する暇もなく、中旬に、幕府の奉書が届いた。内容は、

〃駿河十八萬石と、甲州のうちの六萬石を添えて、駿府城を預ける。〃

という恩栄を示したもので、

〃道中も、この意を体して行列をととのえ、出府するよう
に。〃

とのことであった。

この奉書の内容は、幕府の記録である『徳川実紀』には掲げられていない。輝澄の発病によって、このことが実現しなかったから載らなかったであろうが、『野史』に、

〃輝澄、以外孫故、將封駿河十八萬石。命、未下。〃

とあり、『遺老物がたり』にも、

〃石見守は播州にて七萬石を領せしに、駿河拾八萬石を可被下との御内証有之由。諸人の取沙汰に、権現様御孫にて座^ましませば、さも可有、といえり。』

と出ているので、事実であったことはまちがいなからう。このことを耳にした多くの人が、「権現様御孫にてましませば、さ

時計・ぬがね・宝石

津村時計店

中央通り・TEL②0355

もあるべし」といった、という記述も、当時の世情を反映して
 いておもしろい。

奉書をうけた山崎藩上下のよろこびは、もちろん、ひとかた
 ではなかつたろう。これまでの六萬八千石に比べ、預かり地を
 加えると三倍半の収入となり、城地も海道随一の駿府である。

輝澄の前途は、これによって洋々と開けることになる。藩中の、
 これほどのよろこびは、又とあるまいと思われた。

ところで、輝澄を抜擢してこの大封を与え、要衝駿府に据え
 ようとした家光は、いったい、輝澄をどのように見、また、輝
 澄に何を期待したのであろう？ 一般の噂にのぼったような「

漢方薬と食事指導



山崎町中央通り・TEL ②0109

東照神君の御孫」とい
 うことだけなら、他に
 も、該当するものが少
 なくない。しかし、輝
 澄は、そうした中でも、
 特に、家光に好感をも
 たれていた。秀忠が、
 「其方事、將軍宜しく
 被思」と輝澄に話した
 ことからみてもそれは
 首肯されることで、輝
 澄は、秀忠にも、さら
 には家光にも愛される

素質をもっていたのである。

では、輝澄のどうしたところが、このような好感をもたれる
 もととなったのであろうか。まず、第一は、風采が堂々とし、
 起居ふるまいに節度があつて、諸侯の中でも目立っていたので
 はないかと思う。輝澄の兄忠継が美男子であつたことは記録に
 のこっている。輝澄には、そうした記録がないが、督姫の子と
 して忠継が第一子、忠雄が第二子、輝澄が第三子であるところ
 からみて、輝澄は、忠雄より忠継の方に似ていたのではないか、
 と想像される。忠継ほどではなくとも、風采のあがる方であつ
 たことはまちがひなからう。寛永三年、秀忠・家光が揃つて上
 洛し、後水尾天皇が二条城に行幸されたとき、輝澄は、馬術を
 上覧に供した。少年時代より武道に励み、馬術は特に得意であ
 ったとみえて、秀忠がたいへん賞賛した記録がある。輝澄は、
 秀忠や家光に、「たのもしい青年藩主」とうつつっていたのにな
 がいなかろう。

寛永九年四月、備前岡山城主池田忠雄が急逝した。嗣子光仲
 は漸く三歳になつたばかりである。幕府は、この幼児に、山陽
 道の要衝岡山城をあずけることはできないと、輝澄に忠雄の跡
 を継がせようとした。このとき、輝澄は、「幼少といえども、
 兄の実子があります以上、私は、兄のあとを継ぐことはできま
 せん。どうか、光仲に相続させてください」と申し出た。相続
 人が幼少であるということから、その叔父や従兄弟が代つてあ
 と継ぎとなる例は、当時、珍らしくなかつた。治安第一を考え

幕府の処置としては当然であったにちがいないが、その家にとつてはまことに重大な問題で、こうしたことが、後に、家中の対立、騒擾を招いた例も出ている。輝澄が、こうした先のことまで予見したかどうかかわからないが、少くとも、兄の実子がある以上、これを擁立し、これに継がせるべきだ、という正論を老中に申し出、その通りにさせたことは賞揚されてよからう。幕閣が、輝澄を光仲の後見とし、諸事検分を命じたことは光仲を相続させた以上、当然であるし、輝澄がその命にしたがつて責務を果たしたこともあたりまえである。秀忠・家光は、これら一連の処理をとおして、輝澄をますます好もしく思ったことであろう。

輝澄の事績として、今ひとつ、特筆すべきことがある。それは、忠雄の遺言を守り、河合又五郎処断の一件を推進したことである。詳しいことは前に述べているから省くが、旗本と大名の対立事件まで発展しそうな難問題であっただけに、幕閣も積極的な解決に乗り出さず、うっかりすると、時間の経過とともに風化する傾向さえあったのを、輝澄みずから老中宅へ出向き、強硬に解決への推進をせまり、遂に、その結末をつけたことである。このことは、輝澄の識見と、政治的手腕をみる好個の例で、家光の信頼はいちだんと増したにちがいない。家光は、輝澄の母が自分の伯母であり、若いときから一族としての親しみをもっていたうえに、こうした温厚・篤実・勇敢な性行を見て、由緒ある駿府城の主にしようとしたのであろう。そして、忠長

のような、荷厄介になる一族ではなく、手足となって藩屏の実をあげることが期待したにちがいない。

長水城の盛衰(中)

岩井忠彦

赤松氏が再起を果たし、山名氏の播磨支配が終るとともに、長水城も宇野氏を城主として復活する。

長水城主としての宇野氏は、初代が加順、あるいは満利。その後を継いだ越前守祐秀は、『赤松系図』によれば「宍粟郡・神西郡並二但馬国八東

・七美・朝来以上五郡

高十二万国也」といい、

その曾孫にあたる政頼については『長水軍記

』に「掛保掛西宍粟神

西但馬之内一郡以上五

郡ヲ押領シテ其威近国

ニ振フ」などとみえる。

郡名や所在の国名が誤っている等、全面的に信頼できるものではないが、因幡街道を制す

株式会社

安井書店

90山崎町山崎郡粟宍
TEL山崎②0700(代)

る地に本拠を構え、相当な勢力を有していたものであろう。宇野氏が復興させた長水城の規模等については明らかではないが、宝暦十年（一七六〇）の『手鑑日記』によれば、本丸は東西二十五間、南北二十七間、二の丸は東西二十間、南北二十三間という。石畳を設け空濠を掘り、井戸を備えて、天然の要害に拠る山城としてはかなり大きな戦鬪力を持つ城であった。しかし当時の山城の常として、いわゆる城郭としての建築物はなかったであろう。

この他に、長水城の東側の登山口には、政頼が隠居していたという（『赤松家播備作城記』）五十波構があった。今は老人

表装全般

…古いものを
大切に…

表具師 松本永春堂

山崎町鹿沢本通り
TEL. 2-0122

ホームが建っているところである。隠居所とはいうものの、「南門四方土居、其上に並木あり。西南は堀、北は溪水、東は堀」（『播陽万宝智恵袋』）という、岩と云ってよい構居である。

また、長水城を主城として、南方には牧谷城・篠の丸城が、北方には伊和郷岡城・清野

構が、西方には土万鳥子城・千草黒土城などが前衛となり、さらに各地の山中に砦や寺院が配置されて、要塞線を形成していた。

このように、長水城はよく整備・構成された城であった。しかし、本質的にはなお中世的色採を基調としていたことも、否めぬ事実である。

長水城の大手側の麓にあたる旧葛沢村には上町・下町の地名が残っており、城下町らしい集落の形成は始っていたようである。しかし、城そのものは、戦鬪力のみを重視する、中世的な、典型的な山城として終始した。山名氏が播磨を支配していたころ、すでに山崎の鹿沢に城を築いたという。山名氏といえど、さまで先進的な大名ではないが、それでも長水城を復興せずに鹿沢に築城しようとしたことと考えあわせても、その中世的性格は明らかであろう。

城兵もまた、天正年間に至っても、そのほとんどは純然たる農民兵であったと想像される。

経済的にも軍事的にも近世の幕を開いた信長や秀吉に、最後まで抵抗した長水城が、中世的性格を色濃くとどめていたことは偶然であろうか。

さて、この長水城に織田方の先鋒、羽柴秀吉の大軍が押し寄せて来たのは、天正八年四月のことであった。『長水軍記』には「先勢一千騎、荒木平太夫大将ニテ林田通ヨリ向フ。次ノ一軍一千騎、神子田半左衛門大将ニテ同林田通ヨリ向フ。後陣ニ

ハ秀吉自ラ木村・竹中・石見・樋口其外大勢ニテ林田通ヨリ向ヒ給フ」とある。途中、狭戸・香山での抵抗を排除して山崎に到着した秀吉は、掛保川左岸の、出石の愛宕山上に本陣を布いた（『宍粟郡誌』）。『豊鑑』には、この時、京から来ていた有名な連歌師の紹巴が、「かがり火に鶉の首見ゆる広瀬哉」と詠んで、秀吉に大いに喜ばれた、とみえる。「鶉の」は宇野氏、「広瀬」は広瀬氏にかけた言葉であること、いうまでもない。

いよいよ長水攻めにかかった秀吉は、どのような行動をとったか。彼の戦略は、味方の損失を最少に抑さえつつ、しかも確実に勝利を得るために、極めて合理的である。長水攻略もその戦略を実践する。すなわち、天然の要害に拠る長水山の本城をいきなり衝くのではなく、二十四日から二十六日にかけて五十波や清野の構を抜き、さらに篠の丸をはじめとする支城を落とす後、孤立した長水城を包囲した。しかも、ここに至ってさえなお無理な攻撃を行わず、八合目あたりまで攻め登ったところで包囲網を厳重にして、城兵が逃げ出さぬように監視しておいて、城中の動揺を待った（『続紀伊風土記』）。この間、姫路の英賀城攻略に成功している（一説に、英賀城陥落は二月十三日という）。

秀吉の軍略のもう一つの特徴は、謀略や心理作戦を多様に展開することである。心理戦は孫子の兵法以来の用兵の常道で、これを卑法である、勇気がない、と貶すのは、おそらく江戸時

代に、儒学、ことに朱子学によって培われた、日本人特有の感情であろう。この感覚は日露戦争の二〇三高地攻めから太平洋戦争中の玉砕戦まで続き、日本の歴史に凄惨な彩りを与えている。

しかし、秀吉の合理主義に、その感情の影はない。合戦は、要は勝たねばならない。華々しく散るよりも、泥くさく勝ち残ることである。それが、戦国時代の正義であった。

長水攻めにおける謀略戦は、秀吉にとって好都合な条件があった。その一つは、秀吉の軍中に、宍粟の有力な土豪、安積将監が居り、情報の収集に事欠かなかったことである（秀吉軍の中で、赤松則房に従って功のあった将監は、則房から感状を与えられている）。

いま一つは、長水城に、かねてから政頼の後継をめぐる暗闘があったことである。政頼（祐頼）の後継は結局次男の祐清と決定し、長男の満景は篠の丸城主となって、この争いは一応の決着をみている。

美術・工芸・画材

いとう画廊

贈答品に絵画・軸物・版画を!!

出水町通り・☎2-0371

た。しかし、その対立のしこりは依然として城兵の間にも残っていたはずで、意志の疎通に欠けるところがあり、ここに秀吉の謀略が生きる要因があった。

『長水軍記』には、狭戸・香山の前哨戦から長水城の落城に至るまで、「祐光・祐政八百騎ヲ魚鱗ニ立、一勢ニカケ破ラントスレバ、小寺ガ兵三千、鶴翼ニ開テ取囲マントス……」などと、宇野氏及びその輩下の武士の華々しい活躍を描いている。

戦記物としては見事な叙述であるが、このような事情や地理的条件の下では、長水勢が大規模な野戦を展開できるはずもなく、また長期の籠城に耐えられるわけもない。長水城兵大活躍の話は多分に『長水軍記』作者の脚色によるものであろう。おそらく、局地的なゲリラ戦の他はさしたる戦闘も展開できぬまま、五月十日に長水城は内通者の放火などもあって、あっ気なく陥落したのである（『続紀伊風土記』。『長水軍記』は五月九日に長水落城とするが、『信長公記』や『蜂須賀記』は六月五日とする。しかし、三木城などと違い典型的な山城であり、しかも援軍も望めず補給にも欠ける長水城が、六月五日まで籠城を続けたとは考え難い）。

城の陥落とともに、政頼・祐清らは美作めざして落ちのびようとしたが、蜂須賀・木戸らの軍兵の追撃をうけ、千種の大森で自刃して果てた。彼らの墓碑は今もここにある。

さて、長水城に拠った宇野氏は、なぜこのような無謀ともみえる戦いを始めたのであろうか。

佐藤善五右衛門景長と 津田九郎右衛門の刃傷 (上)

堀口 春雄

佐藤善五右衛門景長、初名織之助、用人佐藤銀右衛門の嫡男なり、父の銀右衛門は若年の藩主本多大和守忠堯の側用人として幼君を補佐していたが、家老の内藤兵馬の専横に逆らって疎外され返えって側近をしりぞけられ、宝暦二年には隠居を願い出てかわりに伴れ織之助を児小姓として差出している。織之助

は生来利発者で幼少の頃は若君忠堯公の遊び相手に上っていたので忠堯公とは一番気心が良く合っていた。年齢も同年輩で真面目で学問好きの彼は老職の間清左衛門や横井隼人らにも愛されていた。剛腹の内藤兵馬は反対派の武士達をどしどし弾圧し藩主の若年を良い事にして藩の財政建

創業嘉永元年 きものと共に130余年
高級呉服の専門店

とくさや

山崎町本町 (さつき通)
☎(07906)2-1680代

て直しと称して御免株を乱発し商人より冥加金を取立てていた。併し其様な専横はそう長く続くはずはなく、宝暦五年五月遂に彼にも断が下され、反対派の結束によって彼は失脚して藩を去った。此の肅清で藩を立退いた家臣は可成有る様である。藩主も織之助の機転で難を逃れ彼は一層信頼を厚くした。併し藩主の忠堯公は生来病弱で宝暦十一年には二十代の若きで世を去られ、末期養子として越前丸岡五万石の有馬家より新藩主が迎えられた。有馬久弥その人である。年齢はやはり二十に未たない若年の藩主であったが、なかなかの賢君で早速本多忠可と改名され新任早々藩の財政困窮を嘆げかれ藩士一同を集めて藩政の改革を教示された。織之助は引続き側近として君側に侍り藩政を補助していたが彼の利発は新藩主にも認められ、江戸にあっては藩の推挙で公儀の御学問所昌平塾にも学び、どしどし取立てられて遂に奉行に抜擢された。藩主忠可公は彼をして藩政の大改革を断行された。以後此の改革を明和の

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL②0036

御改革と称して藩政の規準とされる様になった。今までも重臣達は半知半知と重ねて、知行高も表面上とはかけ離れて少い給米になっていたが明和の改革以後は三拾俵以上は全部藩の合力米として差出し、下級の士もお切米の一〇二割のお借上げは常習となり実に切詰めた生活を強いられている。商人も質素儉約を強いられ御免株を一時解放して自由の楽市を設け、借金も棒引して百姓の困窮を救い、治山治水に力を尽し産業の勃興を計り家中の士も詰以下の武士は非番を利用して内職に精を出させ、一時、炭・たどん・木材等の藩専売を試みた。織之助も奉行になって名を善五右衛門景長と改めた。併し又彼の一貫した強引主義の蔭には又不平の輩も多かった。伝承によれば彼の藩政を批判した落首などがそれを物語っている。或る日出石の舟着場の舟板に可様な落首が貼られていた。『黒砂藤(佐藤)焼いて粉にしてたどんに丸め高瀬に乗せて下り(織之助)け、前後(善五)もわからぬ商いを武士がまねして難波でたたかれ半銭(藩専)も儲からぬとはお景げも長くは続くまい』この落首には奉行佐藤善五右衛門景長の名前がたくみに組込まれていた。善五右衛門は此の貼紙を見て笑い乍らむしり取って懐に入れ別にとがめる様子はなかったと言う。此の話はすぐに拡がり町人衆の寄合の席などで話題になったと言う。併し善五右衛門はこれぐらいの批判でひるむ男ではなかった。善五右衛門が奉行に就任してからは治山治水新田の開発植林、産業の勃興に押進めて行き藩主の絶対的信頼を得ているから少々の反対があ

っても押し切る事も出来て、安永四年彼は愈々家老にまで抜擢されている。藩主の忠可公は又学問や武道にも力を尽し特に心学と称する人間修養の道学に力をそそぎ山崎の本町に温故舎と言う心学の道場を設けて町人といわず武士といわず机を共にして学ばせた。忠可公こそ実に本多家中興の英主と言われ江戸でも名君の誉れ高く松平定信とも親交が厚かった。天明七年老中田沼意次親子が失脚し松平定信が老中筆頭となると彼忠可も又幕布大番頭となり幕政に参与し藩主の座を嫡子忠居に譲り自らは江戸に常住した。忠可公が幕政の要職に就くと善五右エ門も又江戸執政として江戸に住む事が多かった。鬼平犯科帳で有名な火盗改め役長谷川平左衛門などは忠可配下の旗本組であった。こうしてさすがに名君として歌はれた忠可公も寛政六年春には病の床に伏され大番頭の辞表を提出されたが聞入れられず同年秋に亡くなる迄其職にあったと言う。

藩主が病床にある間は彼善五右エ門も片時もお側を離れる事なく看病に精を尽し藩主に代って采配を振った。併し賢君忠可公も次第に病い重り多くの家臣におしまれ乍ら江戸屋敷に於いて世を去った。時にお年五十四才で寛政六年閏十一月であった。本多忠可侯が世を去られてからの佐藤善五右衛門はその信任を一身にあつめていただけに一時は飛ぶ鳥もおとす勢いであった。権勢も次第に落ちていった。それには従来の定席家老達の嫉妬があったかも知れないが藩侯があまりに寵愛された反動もあつてか遂に寛政八年十一月津田九郎右衛門の兇刃にあつて倒れる

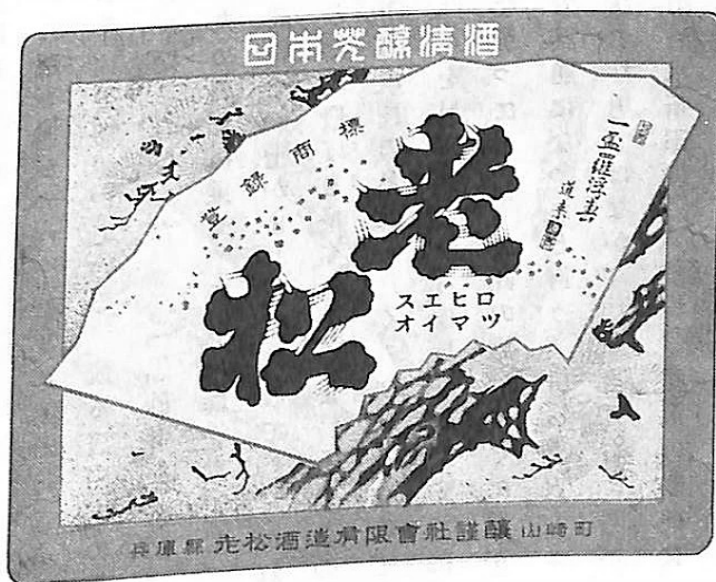
という破目にたち至った。(この津田九郎右エ門の刃傷沙汰については筆者の宗曾祖父島田七郎右衛門がその場に居合せ、又お徒士目附役の役柄を持って終始その模様が詳わしく伝えられているので以下其模様を記す。

高野山参拝の記

志水美好

本年春、弘法大師御入定千五十年祭の御遠忌大法会が、高野山で営まれました。郷土研究会としては、遠距離のため未だ高野山へは行ったことがないので、日程の無理を承知の上で、高野山参拝を計画いたしました。

混雑を極める大法会が終るのを待って、五月二十七日朝七時、一六八名一行はバス四台を列ねて出発しました。心配していた交通渋滞もさ程でなく、予定の十二時に高野山一の橋に着きま



した。

昼食もそこそこで一の橋から奥の院まで歩いて詣ることになり、足の弱い方には申し訳ないことでした。二班に別れて案内人の説明を聞きながら、杉の老木の茂る参道を進みました。道の両側の夥しい墓石・五輪塔、その数約十万基ということでした。曾我兄弟をはじめ織田信長ら戦国の部将たち、徳川吉宗の質素な墓、諸大家の墓、高麗陣敵味方供養碑、駿河大納言が母堂追善のために建てた高野山一の五輪塔……。私たちの知っている名の書かれた標柱を興味深く眺め乍ら進みました。千種町ゆかりの案内人の上手な説明を聞くのに、所々で足を止めるので、



約二軒といわれる長い

参道が、余り苦にならなくてほっとしました。

山崎藩の本多公の墓を道端では見つけることが出来なかった。

御廟橋を渡った頃は、案内人ともはぐれてしまい、各自思い思に連れ立って進みました。弘法大師御入定の御廟前は大変な人の群れで供花と線香の煙、参拝

者の熱気にあふれ、身動きもむずかしい程でした。その間を縫うようにしてやっと参拝をすませ、続いて燈籠堂の地下拝所へもお詣りしました。

奥の院の参拝をすませると、中の橋駐車場に待っていたバスに乗って、お土産を買うため再度一の橋観光センターへ立寄った。連絡不十分のため四台のバスが揃わず、待合せに手間どりが気がでなかった。有名な荻萱堂もバスの中から拝むだけで、総本山金剛峯寺にお詣りする。檜皮葺入母屋造りの主殿・別殿・奥殿・新奥殿の四棟が絡がり、総本山としての構えはさすがです。福島正則が寄進した六時の鐘を右手に見て、壇場伽藍への側道へは入りました。この四月に再建されて、テレビでも放映された東塔を是非とも見ておきたかったです。昭和十二年に再建された根本大塔もついでに詣ったが、高野山の本堂である金堂の方までは足をのぼす時間がなかった。

何分日帰りの旅である上、高野山に留まる時間が三時間程しかないのです、これだけで精一杯という所でした。奥の院の参道を半分だけにすれば、霊宝館の見学が出来たかも知れなかったのにと考えられ残念でした。

予定より大ぶん遅れ三時四十分山を下り始めました。車の上が約五時間もかかる強行軍ではありませんでしたが、天気もよく、道もさ程混雑せず、全員元気で夜八時半に山崎へ帰着出来ました。予想以上大勢のご参加を得ることが出来ましてありがとうございます。

史跡部便り

久保寅夫

昭和五十一年から、始められた史跡の標識も既に三十柱に達しました。それで、本年度は一度小冊子にまとめる計画を樹てました。

八月七日、安井・堀口・春名さんに御足労をお願いして、各所を巡り写真を撮るなどして、準備を進めています。経費の関係もあって、十分なものは望めませんが、出来る限り良いものを作成して、会員の皆様にお届けたいと思っております。

食品の店 いまや

さつき通り4丁目
TEL②0169



事務局だより

- 一、会報を皆様方の広場とする為、会員の原稿を募集いたします。左記事務所宛にお送り下さい。
- 二、秋季研修旅行のご案内を会報に挿入しております。参加ご希望の方は早目にお申込み下さい。
- 三、どなたでも随時ご入会をいたしております。ご親戚、知人の方で未加入の方にご入会をお勧め下さい。

山崎郷土研究会事務局

山崎町出水町

安井清介宅

TEL ②一〇一四